

令和元年6月6日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16744

研究課題名(和文) 会話分析の手法を用いた中断節構文の機能の解明

研究課題名(英文) Discourse functions of suspended clause constructions: A conversation analytic approach

研究代表者

横森 大輔 (Yokomori, Daisuke)

九州大学・言語文化研究院・准教授

研究者番号：90723990

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、従属節が主節を伴わずに単独で用いられる「中断節構文」が果たす相互行為上の機能について、会話分析の方法を用いて記述を行った。研究期間を通じ、自然会話データベースの拡充および会話分析を応用した言語研究手法の検討を行い、データと方法論の整備を行った。自然会話データベースから中断節構文(特に名詞修飾節、副詞節、引用節によるもの)の事例収集を行い、中断節構文が生起する会話文脈の分析を実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中断節構文は、書き言葉に基づく文法からすれば逸脱的な現象だが、日本語母語話者であれば誰も日常的に使用(産出・理解)している表現形式である。したがって、中断節構文の体系的記述は、談話研究としての意義はもちろん、我々の文法知識の一端を明らかにするという意義もある。また、本研究を通じて整備された自然会話データベースと会話分析に基づく言語研究の手法は、話し言葉にみられる様々な言語現象の解明につながる道筋をつけるものである。

研究成果の概要(英文)：This project investigated the interactional functions of Suspended Clause Constructions in spoken Japanese, which are subordinate clauses standing alone as complete utterances without their main clauses. Recordings of naturally-occurring conversation and their transcripts were accumulated to the database for this project, from which examples of Suspended Clause Constructions were collected. The examples with their interactional contexts were analyzed by applying the method of Conversation Analysis to the investigations of grammatical formats.

研究分野：相互行為言語学

キーワード：中断節構文 会話分析 従属節 副詞節 引用節 名詞修飾節

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本語の話し言葉では、従属節が主節を伴わずに単独の発話を構成することがしばしば観察される。Ohori (1995) はこの現象を「中断節構文 (suspended clause constructions)」と名付け、談話上の要因と密接に結びついた言語現象として注目している。

この「中断節構文」という言語形式は、統語的には完結した文になっていないにも関わらず、発話としては完結しているという特徴を持っている。その意味で規範的な文法から逸脱してはいるが、単に発話産出に伴うエラーやノイズではなく、一定の規則性のもと高頻度で生じる現象であり、日本語話者の持つ言語知識の一部を構成していると言える。

機能主義言語学の分野では、Ohori (1995) 以来、構文効果や文法化の例として中断節構文を盛んに取り上げている。また、言語類型論の分野で近年注目されている Insubordination (従属節の主節化現象) (Evans, 2007) の一事例としても関心が集まっている。しかし、これらの機能主義言語学の研究では中断節構文の形式上の特異性に焦点があてられ、談話上の機能の詳細な検討は十分になされていない。

また、日本語学・日本語教育の分野では、同様の現象は「言いさし」と呼ばれ、特に90年代以降活発に研究が進められている。しかし、作例や文芸作品から取った事例などの人工的かつ文脈情報の限られたデータを用いた直感的記述に留まっており、実際の言語使用において中断節構文がどのような機能を果たしているかは明らかになっていない。

2. 研究の目的

中断節構文は、従属節のタイプによって副詞節(「～けど」)、引用節(「～と」)、名詞修飾節(「～みたいな」「～ってゆう」)などに分類できる。本研究では、中断節構文の各タイプが、それぞれ会話の中でどのような機能を果たしているのか、会話分析の手法を用いて記述を行い、中断節構文の機能についての包括的理解を目指す。分析にあたっては、自然会話を録音・録画したデータを利用する。

3. 研究の方法

本研究では、各中断節構文が果たす機能を明らかにするため、会話分析(CA)の手法を応用し、以下の手続きに従って分析を行った。

- (1) 事例収集：当該の構文の事例となる発話とその前後しばらくにおける発話のやり取りのトランスクリプトを会話データベースから収集する。
- (2) 連鎖環境の同定と分類：(1)で得た全事例について会話分析の枠組みによる質的分析を実施し、当該の発話がどのような連鎖(sequence)の構造の中に生起しているかという点から、事例の下位分類を行う。
- (3) オルタナティブとの比較分析：(2)で得た連鎖環境のタイプに関して、当該の構文以外にどのような言語形式が使用され得たか、仮にそのオルタナティブが使われていればその後の展開はどう変わったかという比較分析を行い、機能の類似した言語形式との微細な違いを示す。
- (4) 共通点のボトムアップな抽出：各連鎖環境における記述を統合し、共通の性格を抽出する。

本研究全体を通じて、自然会話の録画・録音データ(合計約100時間)を利用した。データの量と多様性を確保するために、(1)既存の会話コーパスと研究代表者が独自に収録したデータおよび新規に収録したデータを併用した。

4. 研究成果

自然会話データベースの拡充と会話分析を応用した言語研究手法の検討を通じて整備した分析データと方法論を活用し、名詞修飾節、引用節、副詞節のそれぞれが中断節構文として用いられた事例について分析を実施し、学会発表および論文執筆を行った。

(1) 自然会話データベースの拡充

電話会話(計60会話、3.5時間、異なり話者数20名)と対面会話(計7会話、9時間、異なり話者数10名)の収録と書き起こしを行った。

(2) 会話分析を応用した言語研究手法の検討

社会学の研究枠組みである会話分析を、言語研究に応用するアプローチについて、理論的な検討を行った。近年「相互行為言語学」として知られるこのアプローチが、言語構造を相互行為の資源として捉える視点、言語構造を相互行為の結果物として捉える視点、そして言語構造それ自体を相互行為の体現として捉える視点という3つの異なる視点による複合的なものであること、それらに通底するのが参与者の志向性を記述することである、という論点を中心に吟味を行った。さらに、ケーススタディとして、相互行為の中の発話ユニット構築や言語要素による話者のスタンスの表示の問題を中心に、いくつかの具体的な言語現象について記述を行うことで、会話分析の手法を応用した言語研究の枠組みの体系化を行った。

(3) 名詞修飾節による中断節構文の分析

名詞修飾節による中断節構文として、「ていう(という)」および「みたいな」によってマー

クされた発話を取り上げて分析を行った。

まず、「みたいな」発話と「ていう」発話の比較を行った。会話事例における、当該発話の形式的・機能的特徴および前後文脈の特徴を検討した結果、以下のことがわかった。第一に、「みたいな」発話は統語的に断片的な要素に「みたいな」が付与されることで構成されることがしばしばであるが、「ていう」中断節構文にそのような使用は見られない。第二に、「みたいな」発話は、当該発話で提示する情報について相手からの承認・確認を求める（すなわち自分がその内容について不確かであるということを表示する）際に用いられることがあるが、「ていう」発話は、相手が知らないことや十分に伝わっていない事柄を説明する際に使用される。このことは、それぞれの発話の後に起こりやすい反応の違いにも反映されている。すなわち、「みたいな」発話は相手の言ったことの正しさを認める反応（「そうそう」「うん」）を受けることがしばしばであるが、「ていう」中断節構文は新規情報を受け止めるような反応（例えば理解確認の要求やいわゆる状態変化トークンなど）を受けることがしばしばである。第三に、「ていう」発話は、質問に対する回答の発話に用いられるのに対し、「みたいな」発話ではその用法は見当たらない。質問への回答も、相手より知っている立場からの情報提示の一つである。

次に、「ていう」発話が、語りの連鎖において使用される用法に焦点を当て、相互行為上の働きについて検討した。その結果、語りの連鎖における「ていう」発話は、大きく分けて（１）語りの中で「残念な事態」が起きたことを伝える場合と（２）語りの中の登場人物が逸脱的な事態に遭遇して心の中に生じたであろうツッコミを思考の引用として伝える場合という２つのパターンに分けられることがわかった。いずれも当該の語りのポイントを明確にし、語りの連鎖を収束に向かわせる一手として用いられているという共通点が観察された。

(4) 引用節による中断節構文の分析

引用節による中断節構文として、「と」によってマークされた発話を取り上げて分析を行った。「と」中断節構文の多くが理解確認に用いられている点に着目し、同じく引用の構造を有する「～ということですか?」「ってこと?」との比較を行った。その結果は以下の通り。

「と」発話は、直前の発話内容を言い換えたり要点をまとめたりして、それについて確認を求めるのに用いられており、その使用を通じて確信の高さや自分が正しく理解したという態度を示すことができる。この点は次のような発話構造および連鎖構造の特徴から根拠づけられる。発話構造の特徴としては、形態統語および韻律的に疑問文 (interrogative) としての標識を備えておらず、一種の平叙文質問 (declarative question) として作用している。連鎖構造の特徴としては、端的な肯定的応答が早いタイミングで（しばしばその節の述部より前に）返され、それにより発話の重なりがしばしば生じている。この点は、相手からの肯定的応答が強く期待される確認として産出されていることを示唆している。また、「と」発話は、会話の進行性を妨げる度合いを最低限に抑えることができる。つまり、理解確認によって開始された連鎖はそれ以上拡張せず完結し、その前に進行していた活動の続きに戻っていく。

それに対して、「ということですか」による理解確認は、直前の発話の不明点を特定したり、具体化したりして、それについての確認を求めるのに用いられており、その使用を通じて直前の発話に対する驚きやその内容に対してあまり理解できていないことを示すことができる。発話構造の特徴として、発話末尾の上昇イントネーションや疑問の終助詞「か」が用いられるなど、形態統語的ないし韻律的に疑問文として構成されている。「ということですか」による理解確認の連鎖構造の特徴としては、相手の反応が比較的遅いタイミングで（補文節内の述部より後に）返されるという点があげられる。

(5) 副詞節による中断節構文の分析

副詞節による中断節構文として、「けど」によってマークされた発話を取り上げて分析を行った。「けど」が発話末尾に用いられる用法については、数多くの先行研究が存在するが、本研究ではトラブルへの言及（話し手が（他の参加者ないしその場の状況等にみられる）「望ましくない」あるいは「通常の状態から逸脱している」事態・状態について述べること）という相互行為プラクティスに用いられたケースに焦点を当てることで、同じくトラブルへの言及に使用される他の発話形式（具体的には終助詞「よ」でマークされた発話）との比較が可能になった。

トラブルへの言及における「けど」発話と「よ」発話の比較結果は次の通り。「けど」発話によってトラブルに言及した場合、他の参加者からの反応として、謝罪、トラブルの対処、トラブルの対処の拒否、トラブルの対処の第三者への要求などが見られる。したがって、「けど」発話は、話し手が目撃した事態を何らかの対処が必要なものとして提示し、それを提示された他者がどう対処するか反応を伺うのに用いられていると考えられる。その際、誰がどのように対処すべきかといった点については相手に委ねられている。それに対して、「よ」発話によってトラブルに言及した場合、他の参加者は驚きや疑いを示すなどして、情報の新規性に着目した反応を行う一方で、トラブルの対処についてはあまり積極的に行動を見せない傾向がある。したがって、「よ」発話は、話し手がそのトラブルについて知らない聞き手に対して知らせる（知識状態を更新する）のに用いられていると言える。

< 引用文献 >

Evans, Nicholas. 2007. Insubordination and Its Uses. In Irina Nikolaeva (ed.), *Finiteness:*

Theoretical and Empirical Foundations. Oxford: Oxford University Press, pp. 366-431.
Ohori, Toshio. 1995. Remarks on Suspended Clauses: a Contribution to Japanese Phraseology. In Masayoshi Shibatani and Sandra A. Thompson (eds.), Essays on Semantics and Pragmatics, Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins, pp. 201-218.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 7 件)

ENDO, Tomoko, Anna VATANEN, and Daisuke YOKOMORI. "Agreeing in overlap: A comparison of response practices and resources for projection in Finnish, Japanese and Mandarin talk-in-interaction," 『社会言語科学』 21(1), pp. 160-174, 2018 年。(査読あり)

横森大輔. 「会話分析から言語研究への広がり: 相互行為言語学の展開」, 平本毅・横森大輔・増田将伸・戸江哲理・城綾実(編)『会話分析の広がり』, 東京: ひつじ書房, pp. 63-96, 2018 年。(査読なし)

YOKOMORI, Daisuke, Eiko YASUI, and Are HAJIKANO. "Registering the receipt of information with a modulated stance: A study of ne-marked other-repetitions in Japanese talk-in-interaction." Journal of Pragmatics, vol. 123, pp. 167-191, 2018 年。(査読あり)

横森大輔. 「認識的スタンスの表示と相互行為プラクティス: 「やっぱり」が付与された極性質問発話を中心に」, 鈴木亮子・秦かおり・横森大輔(編)『話しことばへのアプローチ: 創発的・学際的談話研究への新たな挑戦』, 東京: ひつじ書房, pp. 113-143, 2017 年。(査読あり)

横森大輔. 「会話コーパスに基づく中断節構文の分析」『日本英文学会九州支部第 69 回大会 Proceedings』, pp. 337-338, 2017 年。(査読なし)

横森大輔. 「言い淀み・フィラー・母音延伸」, 『日本語学』 2017 年 4 月特大号, 明治書院, pp.140-151, 2017 年。(査読なし)

横森大輔. 「相互行為の資源としての「けど」中断節構文」, 『日本語用論学会大会発表論文集』 10, pp. 289-294, 2016 年。(査読なし)

〔学会発表〕(計 7 件)

ENDO, Tomoko, Anna VATANEN, and Daisuke YOKOMORI. Two levels of projection: Cross-linguistic investigation of agreeing overlapping responses. The 3rd International Conference on Interactional Linguistics and Chinese Language Studies, Beijing Language and Culture University, China, Aug. 23-24, 2018.

YOKOMORI, Daisuke. Problem statements with KEDO in Japanese talk-in-interaction, The 5th International Conference on Conversation Analysis, Loughborough University, UK, Jul. 11-15, 2018.

CHEN, Li, and Daisuke YOKOMORI. Display of understanding by understanding check: A study of Japanese utterance-final use of the quotative particle TO, The 5th International Conference on Conversation Analysis, Loughborough University, UK, Jul. 11-15, 2018.

ENDO, Tomoko, Anna VATANEN, and Daisuke YOKOMORI. Cross-linguistic investigation of projection in overlapping agreements to assertions, The 5th International Conference on Conversation Analysis, Loughborough University, UK, Jul. 11-15, 2018.

横森大輔. 「会話コーパスに基づく中断節構文の分析」, 日本英文学会九州支部第 69 回大会シンポジウム第 3 部門(英語学)『構文研究とコーパス』, 中村学園大学, 2016 年 10 月.

VATANEN, Anna, Tomoko ENDO, and Daisuke YOKOMORI. Negotiating units: Overlapping responses in Finnish, Japanese and Mandarin conversation, Symposium on the emergence of units in social interaction, University of Helsinki, 2016.

YOKOMORI, Daisuke. On some interactional practices using "yappari" in Japanese conversation, Kyushu University and University of Arizona Symposium: Topics in Language, Literature and Culture, University of Arizona, 2016.

〔図書〕(計 2 件)

平本毅・横森大輔・増田将伸・戸江哲理・城綾実(編), 『会話分析の広がり』, 東京: ひつじ書房, 2018 年, 全 300 頁. ISBN 978-4-89476-853-6.

鈴木亮子・秦かおり・横森大輔(編), 『話しことばへのアプローチ: 創発的・学際的談話研究への新たな挑戦』, 東京: ひつじ書房, 2017 年, 全 268 頁. ISBN 978-4-89476-818-5.

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：陳力
ローマ字氏名：Li Chen

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。